図書　紹介

「感染症パニック」を防げ！

リスク・コミュニケーション入門

著：岩田健太郎(神戸大学)

発行：光文社／〒112-8011　東京都文京区音羽 1－16－6／
電話 03-5395-8289／新書判／313 頁／価格 860 円（税別）／2014 年 11 月 20 日発行

エボラ出血熱、新型インフルエンザ、デング熱、ＳＡＲＳ、西ナイル熱、炭疽菌等によるバイオテロ…など文明社会となった現代でも、感染症は相変わらず人びとの脅威となっている。いくつもの感染症のアウトブレイクに関わり、“行く先々に感染症の流行あり”とも言われる著者が、その経験を交えながら、感染症を題材としたリスク・コミュニケーションのあり方について解説したもので、感染症以外のリスクを扱う立場にいる人にも役に立つリスク・コミュニケーションの入門書である。

第１章　リスク・コミュニケーション入門

(1) リスク・コミュニケーションとは何か？

(2) リスクを見積もる・リスクに対応する

(3) 効果的なリスク・コミュニケーションのために

(4) 聞き手を動かすコミュニケーション

(5) 価値観・感情とリスク・コミュニケーション

(6) リスクを伝えるリスク

(7) 優れたリスク・コミュニケーターであるために

第２章　感染症におけるリスク・コミュニケーション《実践編》

【エボラ出血熱】

【1999 年の西ナイル熱】

【2001 年のバイオテロ（炭疽菌)】

【2003 年の SARS】

【2009 年の新型インフルエンザ】

【2014 年のデング熱】

以下、サブタイトルの一部を列記して概要に代える。第１章(1)は、なぜ、効果的なリスコミが大切なのか／無関係な人の参画で生じるさらなるリスク／「説得」「納得」「合意」－相手あってのさまざまな形　などである。その(2)は、リスクの見積もり方

－リスク・アセスメント／「起こりやすさ」と「起きると大変」をごっちゃにしないなどである。その(3)は、過去の失敗から学習する／リスク・コミュニケーションを効果的に行う 3 つのポイント／正確な状況把握もやはり大事／検査の数字も理解が必要／感染症の状況判断－基本は、人、場所、時間／どこで起きたのか／状況判断は難しい－間違いを認めないことがダメージを増やす／アウトカム設定のない日本の感染対策／プロフェショナルなリスク・コミュニケーションを日本にも　などである。その(4)は、メンタル・モデル・アプローチ／相手のメンタル・モデルを聞き出す／一方的な情報はコミュニケーションとは呼ばない／クライス・コミュニケーションのあり方と聞き手／3 つのチャレンジ・アプローチ、効果的なプレゼンテーション／リスク・マネージメンとは「自分の知らない領域の自覚」／　などである。その(5)は、相手の言い分を聞いて成立するコミュニケーション／価値観と権利を大事にする　などである。その(6)は、所属団体の方を向いてしまうリスク／上司のサポートは不可欠／組織内でのコヒーレンス(一貫性)／外部に対するコヒーレンス／記者会見のあり方－友好的に、しかし毅然と／会見では現状分析、目標を伝える／怖いところ、怖くないところを伝える／病院全体でリスク・マネージメントを行う形に／パニックになった人々を相手にするには／受け入れられるリスクの違い／科学そのものへの不信－科学者以外を巻き込んで啓発する、言葉の難しさ－意味の違い、解釈の違い　などである。その(7)は、言い方の問題－イメージの変化を活用する、リスク・コミュニケーターと見た目、態度、記者会見はタフな営為、プレゼンターの選択－よけいな露出は避ける、プレゼンテーションの準備－スライドよりトーク、誠実に見えるプレゼン、質疑応答を大切にする、曖昧さと誠実に向き合う、メディアとの付き合い方－影響力を上手く活用する、メディア関係者との距離感、医学知識・情報を必ず最新のものにしておく、アナロジーの罠－通じない人には全く通じない、専門社会議－会議のための会議にしない　である。

第 2 章の実践編ではエボラ出血熱、バイロテロ、SARS、新型インフルエンザ、デング熱について具体的な感染症に関する基礎知識と対応の方法として「どの感染症が」「病原微生物は」「いつ起きているのか」「どこで起きているのか」「何人に起きているのか」「死亡者はそのうち何人か」「臨床症状は」「感染経路は」「潜伏期間は」「日本で、あるいは日本の特定の地域におよぼす影響はあるのか、あるとすればどのくらいか」「診断方法は」「どのように治療するのか」「治療効果はどのくらいか」

「どのように予防するのか」「予防効果はどのくらいか」「どうやって今回の問題を終息させるのか、その見通しは」「法律的な分類は」項目に分け、それぞれについて簡潔にまとめられている。

本書には、実際の感染症を解説し、「どれくらい恐れるのか」を検証するだけではなく、「どのように伝えるのか」のノウハウなど感染症のリスクに直面する重要な内容が盛り込まれており、会員諸氏には是非に読んで頂きたい(学会事務局)。